

【論 文】

家相図・日記に繙く矢田貝家住宅 —建築史学の視点から—

藤木竜也

1. はじめに

本誌では、鳥取県西伯郡伯耆町上細見に所在する矢田貝家に伝わる「矢田貝家文書」をめぐり、多様な視点より考究され論じられるが、その矢田貝家では、主屋、茶室(席名:観楓庵)、腰掛待合、中門、土蔵、長屋門、庭門、離れの8棟が平成23(2011)年に国登録有形文化財に登録されており¹、これらを中心に江戸時代末期から昭和初期の間に断続的に整えられてきた屋敷建物の数々も由緒をもつものである(図1, 2)。

文化財登録は、平成15(2003)年度から平成17(2005)年度にかけて行われた鳥取県近代和風建築総合調査を契機とし²、平成22(2010)年に邸内の歴史的建造物について詳細な調査を鳥取県教育委員会文化財課(現・地域社会振興部文化財局文化財課)の主導で実施したことを経て登録に至ったものであり、筆者はこの調査にて実測調査ならびに調査所見の執筆に関与してきた³。

この調査所見は、文化庁が運営する「文化遺産オンライン」のWEBサイトでごく短い解説として載るが、全文は非公開であり、加えて建屋をそれぞれ述べるにとどまることから屋敷建物の系譜を俯瞰できるには及ばず、嘉永7(1854)年作成の棟札が残存する主屋を除き、竣工年は聞き取り調査と当家に残る古写真に基づいていたため、「昭和前期」などのように年代も広範な記載にとどまってきた。

本稿では、既往の調査において述べるに及ばなかった江戸時代末期から明治時代前期において、初代・齊一郎(1824~1894年)と2代・平重(1851~1904年)による矢田貝家草創の頃の屋敷建物の移り変わりを「矢田貝家文書」にある家相図など家相関係資料より繙く。これに次いで「矢田貝顯造日記」より、4代・顯造(1905~1992年)が施した昭和初期の邸内整備の系譜を詳らかにし、併せてこれらの建屋をめぐる生活と当主(施主)と大工の間にみられる関係性を俯瞰する。

2. 家相図に繙く矢田貝家住宅

(1) 家相図のあらまし

本章では、「矢田貝家文書」にある家相図をはじめとした家相関係資料より矢田貝家の屋敷建物の移り変わりを述べるが、これを繙くことに先立ち、家相図の役割について概観しておきたい。

まず、家相とは「屋敷の形状と家屋の間取り、向き、付属建物との位置関係などから、その家の吉凶禍福を判する考え方」⁶と説明される、いわゆる占術の一つである。これを占うために

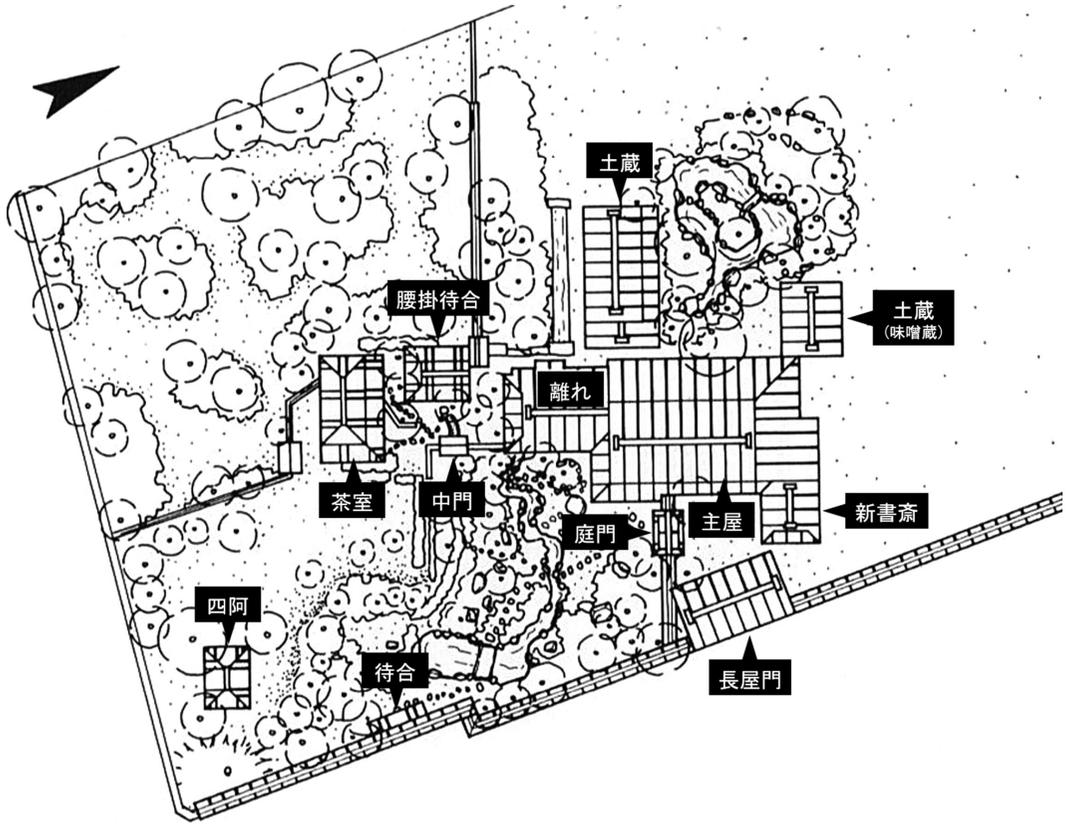


図1 矢田貝家住宅 建物配置⁴

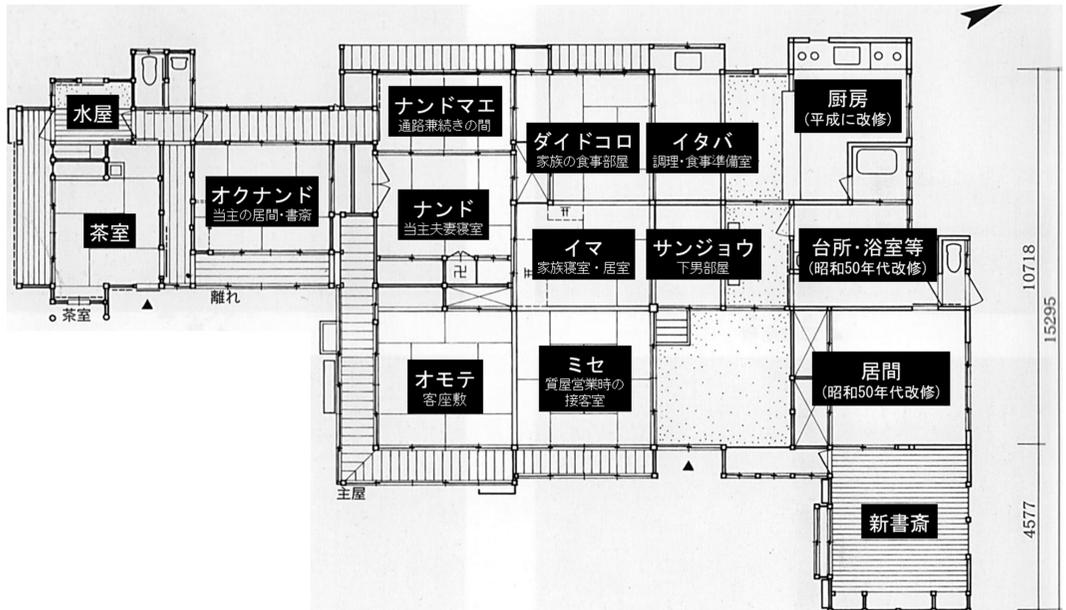


図2 矢田貝家住宅 主屋平面構成⁵

敷地や建屋などを描いた平面図に方位、そして吉凶を書き入れた絵図面を作成する。これが家相図である。

全国的な出版文化の高まりに応じて、まずはこれを指南する家相書が18世紀末から盛んに出版されるようになり、これによって全国に浸透したことで家相図も天保年間(1831~1845年)頃より増え、明治時代まで続くが、その後は減衰していくという⁷。日本近代住宅史の通史では、明治30年代に在来住宅への批判的視点が示され⁸、後に大正時代より生活改善運動が展開されて日照(南面配置)や通風など科学的視点が重視されるようになる⁹。家相図が廃れていったことは、この受容と連関するものとみてよい。

家相図は、これを占う家相見が描くが、建屋を実測して、例えば100分の1など縮尺に則って描いた単なる絵図ではなく、庭園を流麗に表現するなど建築図面にも比肩する水準のものも認められる。歴史的建造物調査¹⁰では、多く平面構成(間取り)を捉えるのに参照されるほどにとどまるもので、それは家相図に描かれるのは間取りのみで建方が読み取れず、占った直後に建てたとも限らないために棟札ほどに建設年代を証するものとして扱い難いことによる。

(2) 「矢田貝家文書」の家相関係資料

「矢田貝家文書」において、家相図をはじめとした家相に関わる資料は次の通りである。

- ① 年月日不詳 家相図(主屋のみ 図3) : 作成者不明
- ② 年月日不詳 家相図(図4) : 幅72cm 高100cm 作成者不明
- ③ 安政7(1860)年 家相図(図5) : 幅72cm 高100cm 確然堂 作成
- ④ 同 鑑定書 : 1通 確然堂 作成
- ⑤ 明治12(1879)年 家相図(図6) : 幅105.5cm 高128cm 福井富久作成
- ⑥ 明治16(1883)年 家屋譲渡証 文書・付図(図7) : 1通
- ⑦ 明治20(1887)年 家相図(図8) : 幅116cm 高120cm 福井富久作成
- ⑧ 明治20~30年代 方鑿書(鑑定書) : 計17通 福井富久作成

家相図が5枚(うち1枚は主屋のみ)、これらに関わる鑑定書が計18通、そして初代・齊一郎から2代・平重へと屋敷建物を譲渡したことを証する文書の所在が認められる。次節で詳述するが、描かれた内容を鑑みれば、家相図のうち作成年不詳の家相図が最も年代を遡るとみられ、主屋の上棟を伝える棟札(図9)に記された嘉永7(1854)年の頃の作成とみてよい。すなわち矢田貝家の屋敷建物の系譜を伝える家相関係資料は、江戸時代末期から明治20(1887)年までに作成されたものであることがわかる(一部の鑑定書は明治30年代にまで作成年代が下るが、この内容から屋敷建物の変遷を捉えることは難しい)。このことは、家相図が全国的に天保年間頃から明治時代にかけて多く作成されたこととも符合するものである。

また、作成者は、安政7(1860)年家相図が確然堂、明治12(1879)年と明治20(1887)年の家相図が福井富久であった。確然堂の家相図は紙に合わせて方位を取り主屋を傾けて描き(これは敷地全体を描いた作成年不詳の家相図とも共通する)、福井富久の家相図では主屋を紙の四

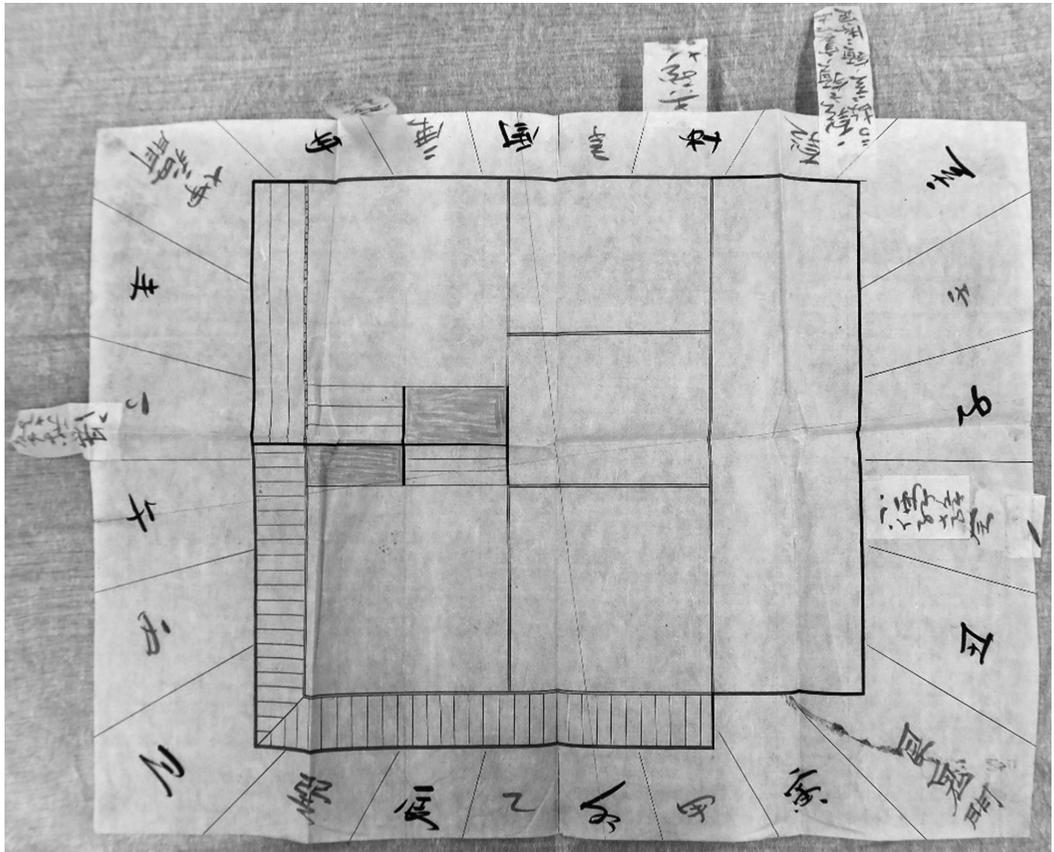


図3 作成年不詳家相図(主屋のみ)

辺に合わせて描いており、作図の方針に差異が認められる。確然堂、福井富久ともに家相見としては他に知られるところはなく、それこそ高名な松浦流による家相図(図10)と比べると記載内容もいづれも伯耆地域で活動した人物とみてよい。

次節では、これら家相関係資料より矢田貝家の屋敷建物の系譜を繙いていきたい。

(3) 家相関係資料にみる矢田貝家住宅の変遷

①作成年不詳家相図(主屋のみ)(図3)

敷地とともに描かれるのが一般的な家相図においては珍しく建屋のみを記したものである。建屋は左右に概ね三分され、前後を連ねた右列が土間とみられ、左列の2室を床と押入で隔てる構成も現在の平面構成と共通することから、これは主屋を描いたものとみてよい。上述の通り、主屋は嘉永7(1854)年の棟札(図9)で上棟の時期が知られるため、この家相図もこれをわずかに遡る頃に作成されたと考えられる。

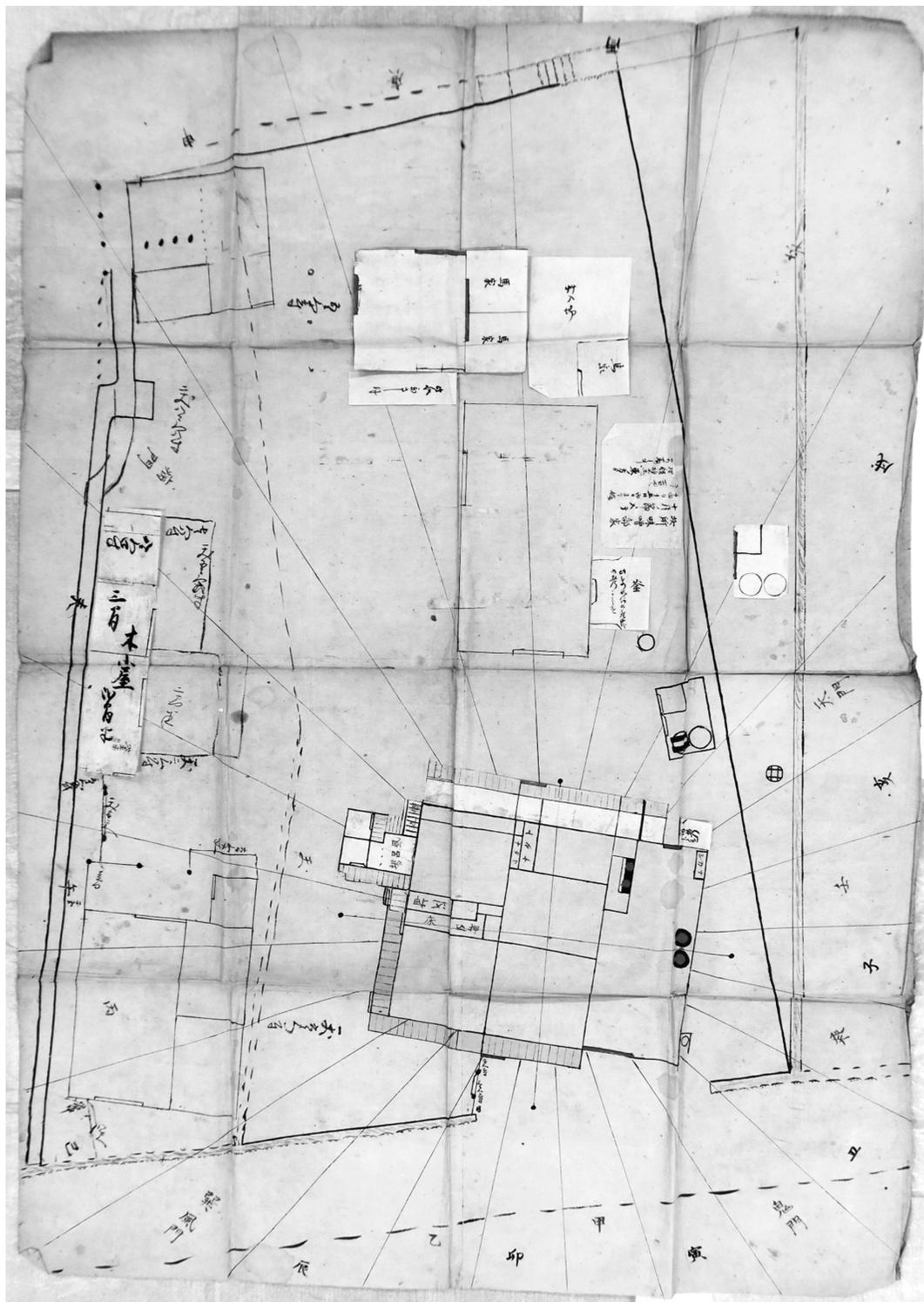


図4 作成年不詳家相図

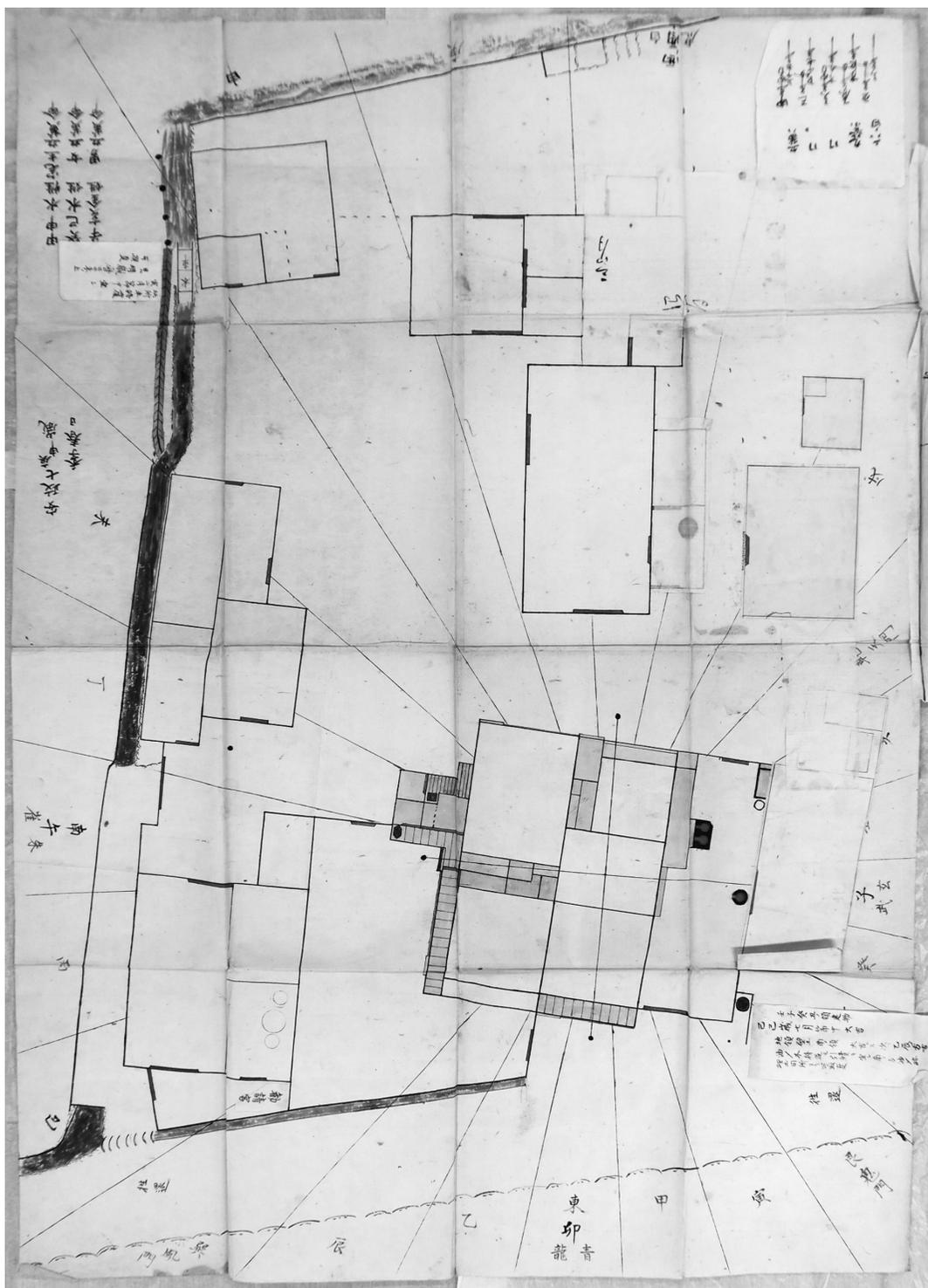


図5 安政7年家相図

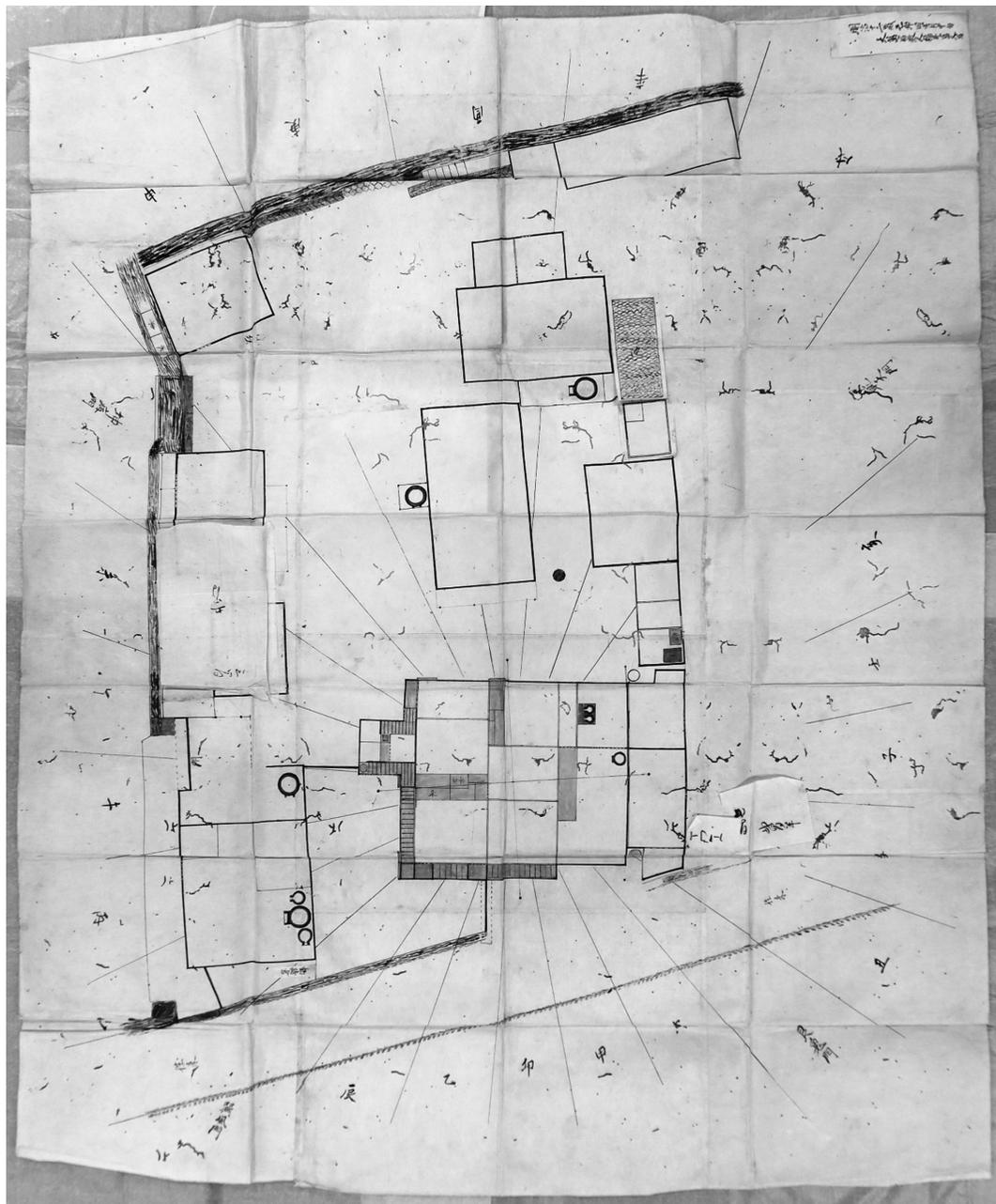


図6 明治12年家相図

②作成年不詳家相図(図4)

主屋上棟(嘉永7年)から安政7(1860)年までの間に作成されたとみられる家相図である。敷地と合わせて描かれており、用途は判然としないが、主屋の西側(後方)から南側(左側)にかけて附属建物が並び、加えて、厩と木小屋を新設しようとしていたことがうかがえ、早い時期から邸内が整備されていた様子がわかる。また、長屋門がなく主屋が前面道路(出雲街道)

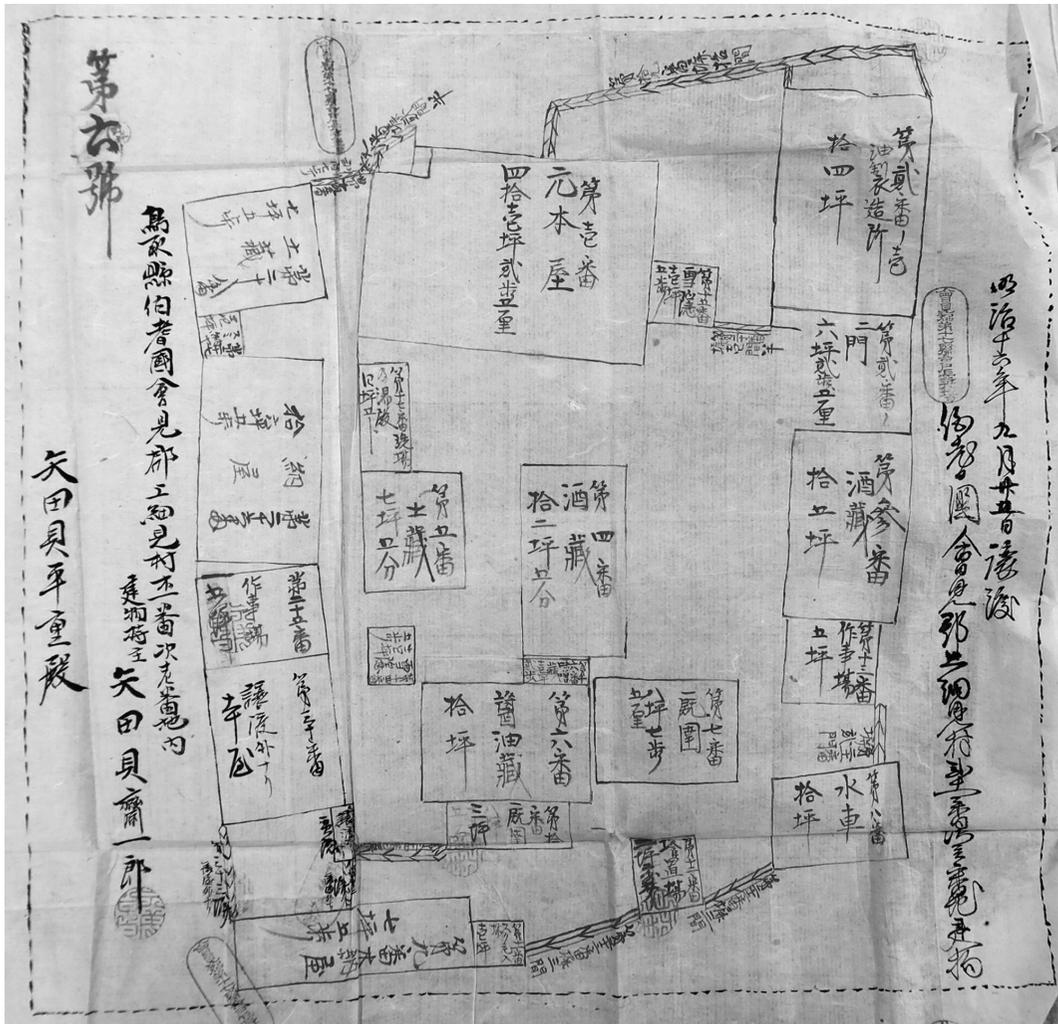


図7 明治16年家屋譲渡証付図

に接しており、このことは明治時代末期から大正時代に撮影された写真(図11)にも明らかである。

敷地は南側が狭く東西に長い形状であるなど、現在(図1)と違っていたことも明白である。家相図に描かれた主屋(図12)は、床、平書院、押入、棚、かまど(竈)、流しと造作が描き込まれ、その設えを伝えるとともに紙片が添付してあることで、風呂場と便所、さらに西側に下屋を増築しようとしていたことが読み取れる。

③安政7年家相図(図5)

「矢田貝家文書」の家相図で作成者(確然堂)と作成年(安政7年)が判明する最も年代を遡るものである。主屋(図13)には便所と風呂場(後述の明治16年家屋譲渡証付図(図7)により「雪隠」の呼称であったことが伝わる)、そして西側の下屋も付されたが、縁側は備えておらず前



図8 明治20年家相図

出の家相図(図12)の通りに設えられていなかったこともわかる。また、邸内の付属建物に大きな変化は読み取れないが、敷地形状には大きな改変があり、北側が拡張されて2棟の建屋が計画されている。

④明治12年家相図(図6)

安政7年家相図(図5)より19年後となる明治12(1879)年に描かれた家相図(図6)で、上述の通り福井富久の作成になるものである。敷地北側に建屋1棟(安政7年家相図にも描かれたが、この時には建てなかったようである)と池、南側に「土蔵」と記した紙片をそれぞれ上張りしており、これらを新たに加えようとしていたことがわかる。

安政7年家相図と相異もみられ、主屋は南西の室が「ナンド」と「ナンドマエ」の2室に分けられ、また北側に増築も行われており(図14)、さらには先に加えられた建屋との間にも小



図9 主屋棟札
(筆者撮影)

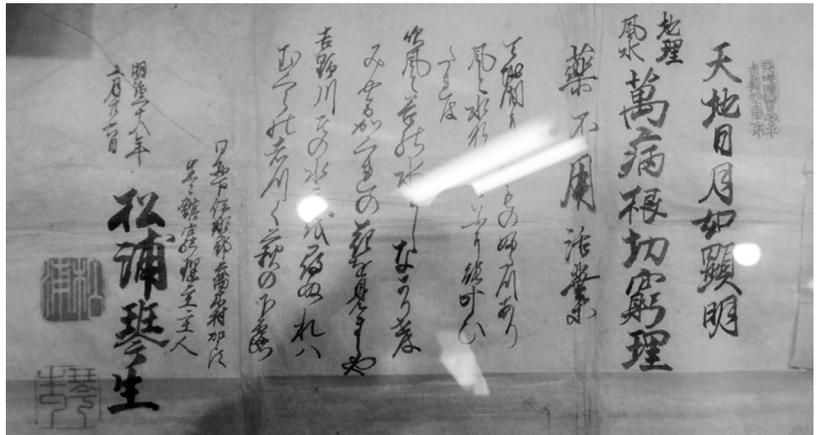
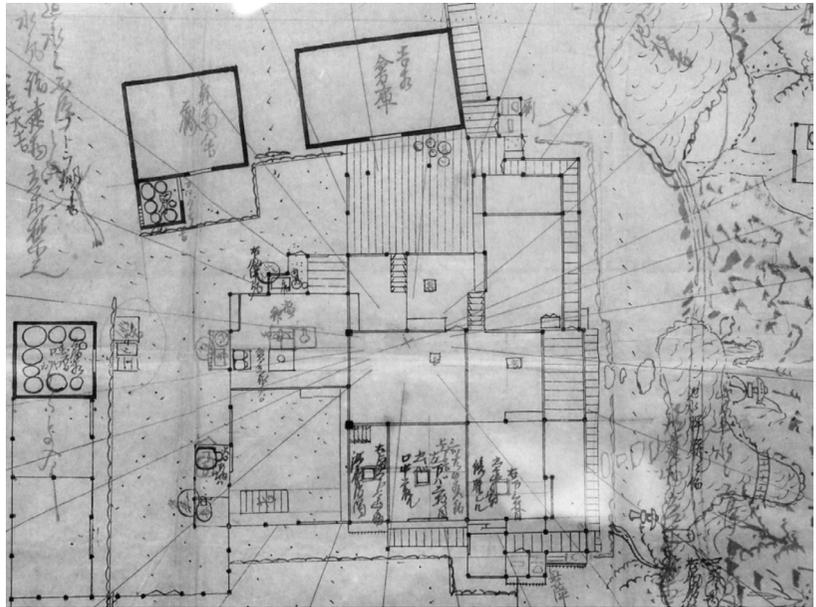


図10 馬場家住宅家相図 明治28年 松浦琴生成作 (筆者撮影)

屋が連ねられている。敷地北西隅の建屋もこれまでには記載がみられず、この間に新設されたことがわかる。

⑤明治16年家屋譲渡証(図7)

初代・齊一郎から2代・平重に隠居屋敷ならびにこれに付属する雪隠と塀を除いた屋敷建物一切を譲渡するために作成され、戸長役場にて登記されたことを伝える証書である。文書では1番から29番までの番号が振られた建屋について(譲渡しない隠居屋敷ならびに雪隠と塀が30~33番)、建物名称、桁行と梁間を柱間で示した建物規模、そして共通して「屋根瓦敷石」とあり、屋根を瓦葺(赤褐色をした石州瓦であったと伝わる)で棟石も載せた山陰地方の民家に良く採られた造りであったことを伝える¹¹。特筆すべきは付図(図7)で配置が示されているこ



図11 明治時代末期から大正時代の主屋正面¹²

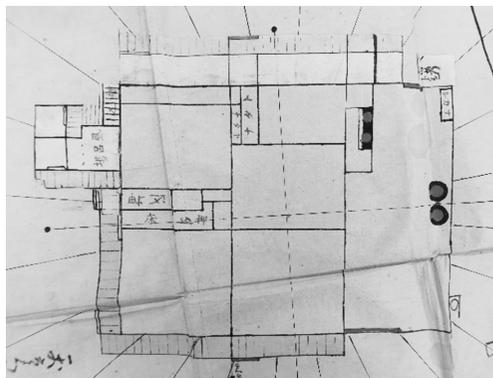


図12 作成年不詳家相図 主屋部分

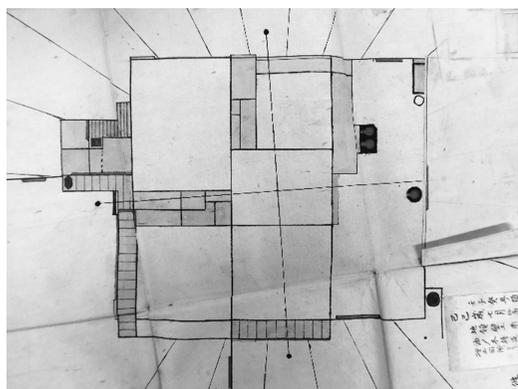


図13 安政7年家相図 主屋部分

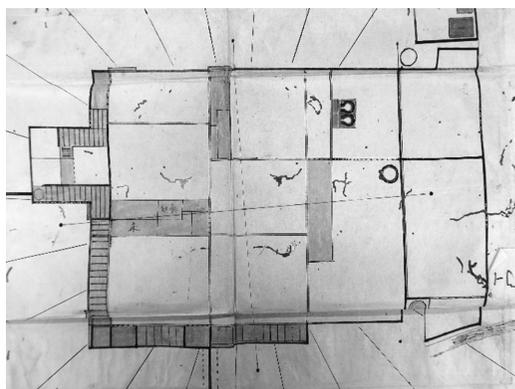


図14 明治12年家相図 主屋部分

とで、それぞれの建屋の用途と規模が明らかとなるほか、併せて明治12(1879)年から大幅な変化があったことも読み取れる(図15)。すなわち敷地北側をさらに拡張して「土蔵」、「炭納屋」、「納屋」、「作事場」、隠居屋敷を建て、また、西側に「味噌蔵」、「厩舎」、「燈置場」(敷地西側に階段を伴う水門があり、この一画を指すと考えられる)が新設されている。

⑥明治20年家相図(図8)

「矢田貝家文書」において最も作成年代が下る家相図である。主屋右手前に土蔵と思しき建屋を建て、かつ敷地南側の「油製造所」、「作事場」を取り除く計画とみられる。併せて主屋の「オモテ」(客座敷)に面する一面を拡張し、庭園の整備を行おうとしていたことが読み取れ、これは後に明治40(1907)年頃に庭門側から撮影したとみられる写真(図16)でその様子を理解できる。加えて主屋でも西側(後方)を半間拡張し、「ナンド」(当主夫婦寝室)と「ダイドコロ」(家族の食事部屋)の間に小間を加えようとしているが(図17)、現在の主屋の平面構成(図2)と違っており、この改変には及ばなかったことがわかる。

なお、占いを記した「方鑿書」17通がみられ(年紀のあるものでも明治26年、同29年、同32年、同33年、同35年と複数年にわたる)、この家相図を基にその後十数年にわたって家相に用

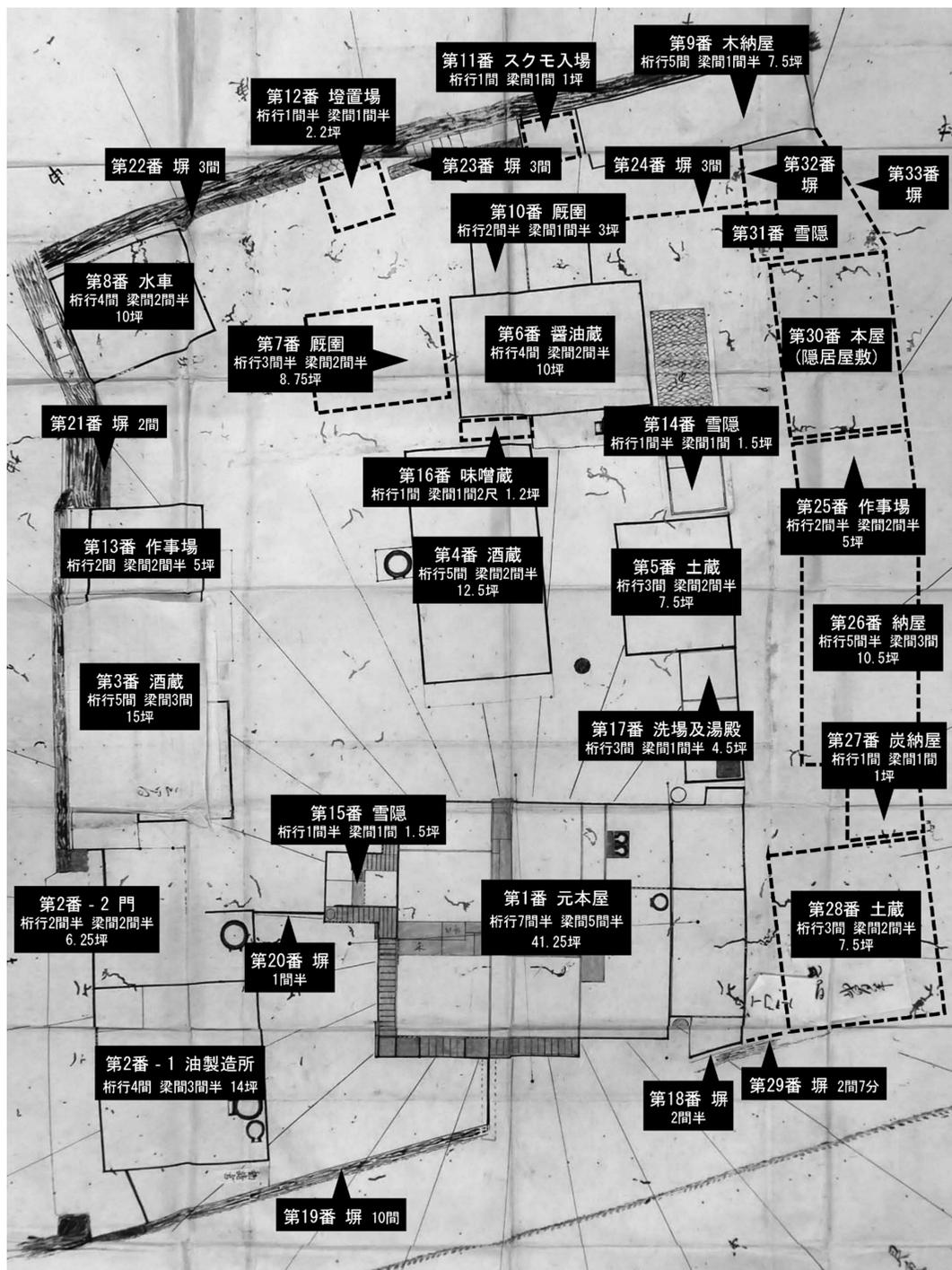


図15 明治12年家相図に加筆した明治16年家屋譲渡証付図の記載内容



図16 明治40年頃の表庭

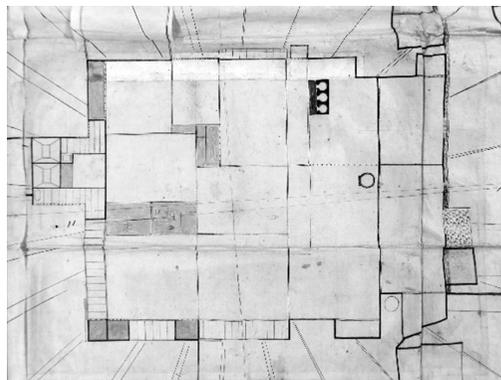


図17 明治20年家相図 主屋部分

いられたことがうかがえる。

(4) 家相図にみる矢田貝家の屋敷建物の整備

本章では、「矢田貝家文書」の家相図をはじめとした家相関係資料より、当家の屋敷整備のはじまりから明治20(1887)年までの系譜を詳らかにしてきた。以下に整理したい。

まず主屋は、嘉永7(1854)年の建設当初は床上部が表側2室、裏側3室の計5室に土間をもつ間取りで、ほどなく安政7(1860)年までに「雪隠」(便所と風呂場)が角屋として南側に増築された。後に明治12(1879)年までに西側(後方)に下屋を拡幅して、南西の室が「ナンド」と「ナンドマエ」の2室に隔てられ、加えて北側の土間も広げられた。後に「雪隠」は取り除かれ、広げられた土間部分も姿を変えることになるが、主屋の基本となる平面構成はこの時まで形成されていたことがわかる。なお、主屋には2階も存在し、「ミセ」より梯子階段をもって昇降する。近世期の民家に散見する階高の低い厨子二階の造りだが、一般に土間上部には設けないことが多いのに対して、矢田貝家では根太天井を備えて広く設えている。草創の頃は敷地内に家財道具を収めるための土蔵がなかったことから必要であったとみられ、そのことが他にみない特異な設えとするに及んだのではないだろうか。

主屋より変化の著しかったのが敷地の拡充であった。早くも安政7(1860)年頃には、敷地北側を拡幅し、ここに「湯殿」、「土蔵」、そして「雪隠」を構えた(家族用もしくは醸造業従事者のためのものと考えられる)。明治16(1883)年までにはさらに北側を広げ、「土蔵」、「炭納屋」、「納屋」、「作事場」のほか、2代・平重への家督相続のために初代・齊一郎が住む隠居屋敷もここに建てた。

明治20(1887)年頃までに邸内に建てられた建屋は、「油製造所」、「酒蔵」(2棟)、「醤油蔵」と多く生業に関わるものであったが、今日の矢田貝家に継承されるものは主屋を除いていずれも知られない。主屋に次いで古いものがその後方(西側)に建つ土蔵¹³だが、資料的な限界から建設年代を明らかにすることはできなかった。一方、主屋後方の北西側に所在する土蔵(味噌蔵)だが、建設年代は不詳ながら曳家をしたことが伝わっており、安政7(1860)年頃に建てられた土蔵と位置と規模も近いことからこの建屋である可能性もうかがわれ、これこそ江戸時代末期にま

表1 「矢田貝顯造日記」屋敷建物整備関連事項(摘要)

年	月日	内容
昭和3年	4月19日	本日ヨリ大工来リ 納戸ノ戸欄ヲ修理シテ洋服棚トスル仕事ニ来リシ為早々起キ
	5月7日	洋服戸欄殆ド完成シタリ。結果ハ實際ハ充分ナラザリシモ予期ニ違ハズ成功セリ。
昭和4年	11月28日	長ラクノ仕事宮造リハ本日ヲ以テ一段落セリ。
昭和5年	7月1日	本日大工芳吉、光二人来リタリ浴室脱衣場ノ床板ヲ取替工事。
	7月19日	大工二人及高三郎ハ奥納戸ノ東側切取工事ニ取カハル。
昭和6年	3月10日	小生ノ考ト門ノ付方ニ少シ相違アリ。ヤリ直ナセタリ。然シソノタメ却テ大ニハ結局手ヲ省カルコトハナラシ。
	3月11日	大工二人、午後時雄シテ三人。高三郎一人 本日ハ門ヲ造リタリ。
	5月29日	夜大工来リ奥納戸ノサキニ茶室ヲ作ル工事ヲ請負ハシム。
	5月30日	内藤ニ行キカネテ註文中ノ「茶室と茶庭」ナル書籍ヲ受取ル。
昭和7年	7月23日	一昨日ヨリノ約ニヨリ石崎ヲ誘ヒ谷本ヲ連レテ吉長後藤ニ茶室ヲ拝見ニ行ク。和洋折衷ニテ茶席ハ二畳ナリキ。
	2月24日	大工昨日ヨリ来リ。茶室ノ仕事。
	10月8日	本日ハ珍ラシク芳大工来リ光大工ト共ニ茶室ノ仕事ヲナス。
昭和8年	1月10日	本朝ヨリ畳屋来リ茶室ノ新床ニ取掛ル。
	3月1日	茶室炉ニ石灰ヲ入レテ初メテ大ラシタリ。
昭和9年	7月10日	愈々本日待望ノ四阿建設ニイタル。所謂建前ナリ。屋根屋四人来リ萱ヲ揃エタリ。
	7月11日	大工二人屋根ノ下工作ヲナス。屋根ハ麦藁ヲ揃エタリ。
昭和10年	4月3日	本日ヨリ大工二人及畑田ト共ニ屏ノ移転ニ取掛ル。
	4月28日	大工ハ屏ノ形体ヲ建起セリ。
	7月12日	前中大工ハ屏ノ屋根板ヲ打ツケタリ。左官ハ屋根ニ瓦ヲシキタリ。
昭和11年	5月27日	又小田来リ煎茶室ノ口〔石偏十甫〕石ニツキ相談ス。
	11月23日	芳大工ハ煎茶席ノ仕事ニ取カヘリタリ。
	12月6日	本日煎茶席ノ柱ヲ建テタル由。
	12月30日	前中及午後ノ二回ニ亘リ昨日商談成立セル旧伊藤茶室ノ用材及下石瓦ヲ持参セリ。
昭和12年	12月31日	帰レバ米子ヨリ旧伊藤家茶室ノ建具持参。
	7月8日	本日ハ岡野主人ニ来リ煎茶室ノ瓦ヲ敷キタリ。
	11月5日	例ノ武信ノ露地門ヲ搬入セリ。
昭和13年	11月13日	例年ノ如ク本日ハ小生ノ誕生日ナレバ記念撮影ヲナス。長谷川ヲ招致シ全家族打揃ヒテ煎茶室前ニテ。
	4月9日	本日ヨリ元伊藤茶室建築工事ニ取掛ル。
	4月18日	本日ハヨキ日ナルニヨリ旧伊藤茶室ノ建上ゲヲナス。
	9月7日	本日ヨリ左官モ来リ茶室ノ二丈ノ方ノ床ノ周囲ナドノ木舞ヲナシタリ。岩田ハ左官ニ追ハレテ火灯口ナドノ取付ヲナス。
	9月9日	八時過ヨリ重利来リ麻殻(ガラ)ヲ糺ム為ナリ。即ニ二丈ノ方ノ床天井ナリ。
	9月12日	床天井、窓竹、中ノ間天井ヲ張ル。
	10月15日	朝少シオソクヨリ岩田大工及松本大工来リ雨戸ヲ建テタリ。次デ円窓ノ障子ヲ作ル。夕方漸ク成功セリ。
	10月16日	午後ハ新茶室ニテ初蔵ヲ招致シテ美世子ノ手前ニテ喫茶ス。
	10月31日	左官午後ヨリ来リ茶室ノ中塗ハ九分通り終ル。
	11月10日	左官ハ茶室ノ屋根ノ漆喰ヲアリ露地門ニカヘリタリ。
	昭和14年	1月25日
2月5日		旧伊藤茶室ヲ親楓庵ト命名ス
2月8日		大工、父子高三郎モ来リ待合建築ヲ続行セリ。
6月8日		露地門ノ屋根本日まで完了。
7月9日		待合一段落
8月11日		岩田来リテ露地門扉ヲ取付タリ。
昭和15年	1月14日	九時前ニ岩田大工来リ愈々前門ノ改築ヲ着工セントス。
	6月27日	大工等ハ門内ノ小座敷ノ座張ヲナス。
	10月5日	大工ハ杉田ノミニテ門内座敷ノ床ヲ取付ケタリ。天井ニカハル。左官ハ廂ノノシヲ取付ケ終リタリ。
	10月24日	大工二人ニテ前中ニ門扉ハ全部取付タリ。
昭和16年	1月9日	門内ノ天井ノ用意ノタメ梁ヲ切りテ上ゲタリ。
	2月14日	松田大工ハ久々ニ来リ天井板削リヲナシタリ。明日ハ終了セン。



図18 表庭(昭和5年4月5日撮影)



図19 庭門(昭和5年4月5日撮影)



図20 大正時代の矢田貝家住宅全景

で建設年代が遡る主屋に次いで古い建屋とみられるかもしれない。

3. 「矢田貝顯造日記」(1928-1941)に繙く矢田貝家住宅

(1) 「矢田貝顯造日記」にみる建築関連の記述

今日の矢田貝家住宅は、4代・顯造(1905~1992年)により整えられたことで知られ、国登録有形文化財に数えられる茶室(席名:観楓庵)、腰掛待合、中門、長屋門、庭門、離れもこの時期に整備されたものと伝わる。この系譜を繙くのに格好の資料が「矢田貝顯造日記」であり、表1に主たる屋敷建物の整備に関わる記載を抽出した。

庭園が昭和4(1929)年に表庭拡張、昭和5(1930)年に裏庭、そして昭和10(1935)年に表庭再拡張、昭和14(1939)年に露地(茶庭)と整備されており、総じて先に庭園が整えられてから建屋が建てられていることに注目できる。日記内において来客に庭園を見せる記述が散見され

ることからも、建屋は庭園の付属設備という見方も大きかったことを思わせる。

(2) 昭和初期の邸内整備

「矢田貝顯造日記」に記録される最も古い大工仕事は、「ナンド」の戸棚を洋服棚に改めるもので、昭和3(1928)年4月から5月にかけて記される。建築工事は日常的な修繕や造作を含み多岐にわたる記載がみられるが、これを新築ないし大幅に改修した建屋に絞って時系列をもって取り上げていく。

昭和4(1929)年11月28日に「長ラクノ仕事宮造りハ本日ヲ以テ一段落セリ」とあり、「宮造り」に取り掛かっていたことがわかる。これは表庭の築山に置かれた一間社流造の社と考えられる建屋とみられ、昭和5(1930)年4月5日に撮影した写真(図18)にうかがえることもその証左となろう。この社は今日にも現存するが、創建時は柿葺であったとみられ、後に銅板葺へと改めていることがわかる。

その後、昭和6(1931)年より建築工事の記述が目立つようになり、邸内整備が本格化したことを伝える。まずは「本日ハ門ヲ造リタリ」(3月11日)と門の造営を行っており、これは主屋左脇に建つ庭園と隔てる庭門¹⁴とみてよい。旧来より同一位置には庭門があり(図11)、この造営は昭和4(1929)年の表庭整備に伴って設えられたものといえるが、拡幅した上で屋根も改めていることから大幅に姿を違えるものといえ(図19)、これは新築に相当するものとみてよいだろう。

同年4月からは「今後茶室ノ話ナドス」(4月4日)と茶室を建てる計画がはじまり、これは「奥納戸ノサキニ茶室ヲ作ル」(5月29日)こととなった。「オクナンド」は、主屋の「ナンド」の南側にあった「雪隠」を建て替えてきたもので、茶室と合わせて昭和初期に離れ¹⁵として備えられたとされてきたが、「矢田貝顯造日記」にみられるこの記述は「オクナンド」と茶室の建設時期を違えることを意味する。これに先立つ大正時代の矢田貝家住宅の全景を伝える写真(図20)には「オクナンド」の姿がうかがえ(従前に建てられていた「雪隠」と見るには建屋の規模が明らかに大きいことから判断できる)、これが大正時代には備えられていたことを明らかにしている。新たに増築された茶室は、昭和8(1933)年3月1日に「茶室炉ニ石灰ヲ入レテ初メテ大ヲシタリ」と記され、この時までには完成していたといえるが、「茶室と茶庭」ナル書籍ヲ受取ル」(昭和6年5月30日)として茶室に関する書籍を取り寄せ(保岡勝也『茶室と茶庭』鈴木書店、昭和2年と思われる)、また、「吉長後藤ニ茶室ヲ拝見ニ行ク。和洋折衷ニテ茶席ハ二畳ナリキ」(同7月23日)と、近隣(吉長)に茶室の見学に出かけており、その見識を深めていたことも伝わる。

続いて建てられたのが「四阿」(東屋)¹⁶であった。昭和9(1934)年の竣工で、はじめは裏庭の築山に建てられ(図21)、後に戦時中にこれを表庭に移したという。翌昭和10(1935)年には、築地塀に取り掛かっており4月から7月まで3カ月を要している。これは同年に施された表庭の再拡張に伴い建てられたものであったと考えられ、そのことがこれだけ長きに及んだ理由であろう。

さらに昭和11(1936)年には「煎茶室」の建設計画がはじまり、昭和12(1937)年7月頃には



図21 裏庭築山に建つ「四阿」



図22 「煎茶室」(昭和12年11月13日撮影)



図23 「観楓庵」茶室(昭和14年11月13日撮影)



図24 中門(昭和15年11月13日撮影)

完成していたとみられる。「例年ノ如ク本日ハ小生ノ誕生日ナレバ記念撮影ヲナス。長谷川ヲ招致シ全家族打揃ヒテ煎茶室前ニテ」(昭和12年11月13日)とあり、この時に撮影した写真(図22)が残されていることで建屋が同定でき、これが築地塀に接して建つ待合¹⁷であったことがわかる。

これと同時に進められたのが、後に「観楓庵」と名付けられた茶室で、これは他所(伊藤家)より買い取り邸内で再建したもので(図23)、「午後ハ新茶室ニテ初蔵ヲ招致シテ美世子ノ手前ニテ喫茶ス」(昭和13年10月16日)とあり昭和13(1938)年には竣工していることがわかる¹⁸。続く昭和14(1939)年には、「待合一段落」(7月9日)、「岩田来リテ露地門扉ヲ取付タリ」(8月11日)と、腰掛待合¹⁹と中門²⁰(図24)を建てたことが伝わる。なお、この中門も「例ノ武信ノ露地門ヲ搬入セリ」(昭和12年11月5日)と、「観楓庵」茶室と同様に他所からの移設であったとみられる。

邸内の建物整備は概ね終わり、翌昭和15(1940)年には「前門ノ改築ヲ着工セントス」(1月14日)として長屋門²¹の整備に着手している。元々主屋の正面右手前に前面道路に直交して建ち、かつて醸造業を営んでいた頃の進入路、後には裏庭への庭門となってきた建屋であった。これを「表門」とすべく改修を施していたが、「矢田貝顯造日記」が昭和16(1941)年2月15日



図25 「新書齋」外観(筆者撮影)



図26 「新書齋」内観(筆者撮影)

をもって以後の翻刻がないことから完成時期は不詳だが、「松田大工ハ久々ニ来リ天井板削リヲナシタリ。明日ハ終了セン」(2月14日)と内部造作に工事が及んでいることから昭和16(1941)年のうちには竣工していたと考えられる。大正時代の矢田貝家の全景(図20)にも所在が認められ、明治30年代には建てられていたと伝わるが、1年余に及ぶ長期間に亘る工事が行われており、「表門」とすべく先の庭門と同様に新築に比肩するほどの大幅な造作の変更が伴うものであったことを想像させる。

この後、長屋門を移した余地に主屋の土間に連ねて建てたものが「新書齋」と呼んだ角屋である。内部を真壁と竿縁天井として和式の装いをもちながら、床は板敷で壁は綿壁、地袋をもつ飾り棚を備えて、また南北側の壁面は高窓と雪見窓をもち、とりわけ南側壁面には引違いのガラス戸を入れた出窓といった近代的な設えを併せもつ(図25、26)。これは民芸調の意匠に分類し得るもので、全国的にも大正から昭和初期に同様の意匠をもつ事例が散見できる。併せて玄関脇に応接室を思わせる配置で建てており、明治から昭和初期の中流住宅の形式として流行した「洋館付加住宅」²²を彷彿とさせる形状で、これが戦後にはとられなくなっていくことを鑑みれば、矢田貝家に伝わるように長屋門を移してほどなく戦中の時期に手がけられたことも不自然ではない。

以上に述べてきたように、本節では「矢田貝顯造日記」より昭和初期の邸内整備を繙いてきたが、これを改めて整理すると、①社[昭和4年]、②庭門[昭和6年]、③茶室[昭和6-8年増築]、④四阿(東屋)[昭和9年]、⑤築地塀[昭和10年]、⑥「煎茶室」(待合)[昭和11-12年]、⑦「観楓庵」茶室[昭和13年]、⑧中門・腰掛待合[昭和14年]、⑨長屋門[昭和15-16年改修]、⑩「新書齋」[戦中増築]の順をもって整備されてきたことを明らかにできた²³。

(3) 矢田貝顯造の邸内における生活と大工との関係性

① テキストマイニングの概要

矢田貝家における昭和初期の邸内整備をみると、1つの建屋を終えると次の建屋というように連続的に取り組まれていることがわかる。これを4代・顯造の普請道楽とみることは容易だろうが、例えば、「大工モ来ラズ。一向ニ淋シ」(「矢田貝顯造日記」昭和5年7月28日)とみ

られるように、意図的に仕事をつくり続けていたように映らなくもない。いずれにしても14年間に亘り、当主(顯造)の生活を記録し、ひいては大工との関係を伝えるという観点では「矢田貝顯造日記」が重要な資料であることには違いなく、これを本節ではテキストマイニングの手法をもって繙いてみたい。

このテキストマイニングと呼ぶ分析手法は、大量のテキストデータから計量的分析によって新たな知見を得ようとするもので、筆者の専門とする建築史学分野ではこれを用いた研究は少ないが²⁴、日記を研究資料としてテキストマイニングをもって考究した歴史研究に類する論考や研究課題も認められ²⁵、「矢田貝顯造日記」についてテキストマイニングによる分析を行うことは有意義なものであろう。

なお、テキストマイニングについて本稿ではKH Coder²⁶を使用した。自然言語処理における形態素解析では、抽出された形態素の品詞情報を見直して適宜修正を行うのが通例だが、「矢田貝顯造日記」では、1日にあった出来事を短文で区切って記述する体裁もあり1文が短いことも鑑み、名詞と動詞に限定して頻出語の抽出と共起ネットワークにより考察を行った。

②矢田貝顯造(当主)の居所と行為

「矢田貝顯造日記」を通覧して興味深く映ったことが、邸内における当主(矢田貝顯造)の居所とそこでの生活実態の描写が年代の推移とともに増えていくことで(表2)、昭和5(1930)年から昭和11(1936)年前後を最盛にして「オクナンド」の記述が多く、一貫して顯造の居所であり続けてきた。先述の通り「オクナンド」は、大正時代には備えられており、これは先代から引き継がれた慣習と考えられよう。

茶室もまた顯造がよく出入りしているが、「オクナンド」への増築時はそこまで頻度は多くなく、昭和12(1937)年以降に目立つようになる。それこそ「観楓庵」茶室を建ててから後には「オクナンド」に増して日記に記されるようになる。

茶室の記載が増えるのに併せて「新座敷二階」もその数を増やすようになる。これは敷地北側に建つ建屋で、とりわけ北東隅に位置した「下場」の2階に「清茂肺炎ノ兆見エタリ。依テ下場ヲ座敷ニ移ス準備ニ」(昭和4年2月21日)として整えた座敷で、清茂(顯造5歳下の弟)が岡山の(旧制)第六高等学校に通い、一時的に不在となった時期(昭和4年9月)に喫茶ないし読書で使用したことが4度(9月17日、20~22日)にわたって「矢田貝顯造日記」に記されている。2人の弟(清茂、正巳(顯造9歳下))が肺結核を患い、隔離病棟²⁷として用いたが、昭和9(1934)年に相次いで亡くすに至り(顯造の心痛のほどは日記からもよく読み取れる)、これを後に「新座敷」として使うようになった居所であった(図27、28)。これは明治16(1883)年家屋譲渡証付図(図7)に記された「土蔵」の位置に建つが建設年は不詳で、昭和59(1984)年頃に解体され現存しない。

これら「オクナンド」、茶室、「新座敷二階」では、喫茶、独楽²⁸、新聞を読む、ラジオを聴く(ニュース、野球、相撲)、囲碁を打つ、将棋を指すといった行為と共に記され(茶室では喫茶が多く、「新座敷二階」では涼風にあたるなど、わずかな使用方法の差異が読み取れる)、また、家族と接する場ともなってきたようである(図29~31)。

表2 「矢田貝顯造日記」にみる当主(顯造)の居所

	昭和3年	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	計
オクナンド			8	3	15	94	72	101	200	130	55	40	31	12	761
茶室						3	9	17	8	87	76	145	114	20	479
新座敷二階								1		68	2	60	23		154



図28 「新座敷」内観(昭和30~40年代撮影)



図27 「新座敷」外観(昭和30~40年代撮影)

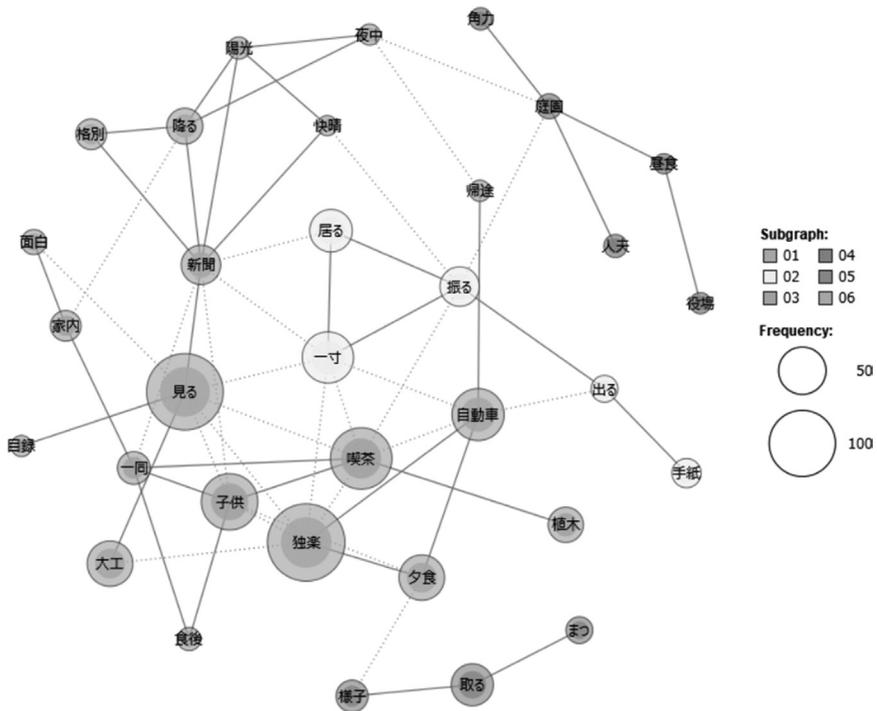


図29 共起ネットワーク「オクナンド」

表3 「矢田貝顯造日記」における大工の記載日数

	昭和3年	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	月別計
1月			1	2	14	23	1	2	1	2	4	5	18	20	93
2月	1		2	1	16	22		1	2	4	1	21	10	2	83
3月			2	6	23	16	7	5	2		12	20	30		123
4月	8	1		7	19	3	4	24	6	3	24	10	14		123
5月	30		5	4	20	5	1	10	1		1	11	31		119
6月	2				6	3	14	15	8	3	4	20	29		104
7月	2		13	3	10	1	23	26	7		11	10	23		129
8月	3		1	1	18	2	13	8	2	2	13	7	13		83
9月	6			1	16		6			2	12	1	1		45
10月	2	6	1	5	14	1		10			15	2	18		74
11月		14		1	13				9	9	2	1			49
12月			3	2	18				26		8	3	2		62
年別計	54	21	28	33	187	76	69	101	64	25	107	111	189	22	1087

表4 「矢田貝顯造日記」における大工関連記述の頻出上位10語（〔 〕内は各語の記載数）

	全年代	昭和3年	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年
1	岩田 [491]	仕事 [27]	芳吉 [7]	仕事 [11]	掃 [11]	仕事 [112]	仕事 [42]	仕事 [26]	岩田 [48]	芳吉 [54]	芳吉 [27]	岩田 [84]	岩田 [88]	岩田 [208]	石工 [43]
2	仕事 [473]	見る [20]	仕事 [6]	芳吉 [7]	宗一 [8]	見る [100]	見る [35]	岩田 [22]	仕事 [37]	仕事 [27]	取付 [6]	仕事 [42]	仕事 [41]	石工 [111]	井原 [79]
3	芳吉 [207]	取る [5]	弟子 [6]	高三郎 [4]	見る [7]	宗一 [27]	宗一 [19]	左官 [21]	左官 [32]	見る [25]	仕事 [5]	見る [27]	豪 [36]	一人 [110]	松田 [19]
4	見る [352]	左官 [3]	見る [5]	掃 [3]	仕事 [6]	芳吉 [22]	左官 [10]	見る [18]	芳吉 [30]	煎茶 [7]	取る [5]	左官 [22]	父子 [30]	杉田 [83]	岩田 [13]
5	石工 [173]	出る [3]	左官 [4]	儀一 [3]	芳吉 [5]	掃 [18]	掃 [8]	屋根 [12]	香川 [23]	取る [6]	福島 [5]	父子 [20]	見る [24]	仕事 [82]	小沢 [13]
6	左官 [163]	製作 [3]	屋根 [3]	見積 [3]	武知 [4]	武知 [15]	伊川 [7]	話 [7]	屏 [22]	取付 [6]	岩田 [4]	福島 [19]	芳吉 [21]	見る [52]	仕事 [9]
7	一人 [122]	半鐘 [3]	掛 [3]	工事 [3]	茶室 [3]	囲碁 [5]	重利 [6]	掃 [7]	見る [21]	製材 [6]	朝 [4]	朝 [14]	取る [14]	左官 [50]	君夫 [7]
8	取る [100]		取る [3]			左官 [12]	畳屋 [5]	建具 [5]	屋根 [8]	朝 [6]	米子 [4]	椀皮 [14]	朝 [12]	兄弟 [34]	見る [6]
9	掃 [94]		露 [3]			朝 [11]	朝 [5]	芳吉 [5]	取る [7]	掃 [5]	露地 [4]	取る [12]	待合 [9]	井原 [31]	削る [6]
10	杉田 [89]					便所 [11]	話 [5]	一寸 [4]	取付 [7]	岩田 [4]	見る [3]	一寸 [10]	話 [9]	取る [27]	杉田 [5]

昭和初期の邸内整備は、総じて顯造の社会的地位に伴う必要性から求められ、当時の中規模地主のもつ文化と教養が顕在されたものとみられるが、これらが家族を含む日常生活を豊かにしてきたことは日記を繙くからこそ知り得たものだろう。

③矢田貝顯造(当主)の大工との関係性

続いて、顯造(当主)と大工との関係性をみてみたい。表3に日記において「大工」に言及した日数を年別、月別で集計すると、年別では、昭和7(1932)年、昭和10(1935)年、昭和13~15(1938~40)年が多い。これらは上述の通り一連の茶室建設とこれに次いで行われた長屋門の整備に依るものである²⁹。一方、月別では3月から7月にかけて多く、9月から12月が

少ない。時期は違えるが「大工来リシモ他^ヲノ仕事ヲナシタリ」（昭和15年6月17日）とも記されたりすることから、矢田貝家と違える場所でも仕事を抱えていたとみるのが自然だろう。

続いて、その内容をみるために表4に全年代ないし年別の上位10語の頻出語を抽出した³⁰。各年代で上位に頻出するのが「仕事」を「見る」で、今日にいう設計監理の立場が顯造（当主）と大工の関係で、時には自ら手伝うことも散見された。また、「帰」や「朝」は、帰宅後や午前中の外出前などの仕事を見た時間帯を記したものである。

矢田貝家に入入りしていた大工は、大きく2名あり「岩田」と「芳吉」である。芳吉は「芳」とも略されて記され、日記には一貫して名字が示されておらず、釣りであったり（昭和3年6月8日、昭和5年8月18日）、夜にラジオを聴いたり（昭和9年4月19日）、「オクナンド」で喫茶して話をする（昭和10年1月17日）というように顯造との距離の近さを伝える人物である。なお、「高三郎」は木挽、「儀一」、「宗一」、「武知」、「伊川」、「重利」は手伝いで芳吉と共に名を連ねることが多く、このことは大工に関する記載の多い昭和7（1932）年の共起ネットワーク（図32）にも読み取れる。

芳吉は昭和14（1939）年まで数を減らしながらも日記にみられるが、これに代わるように頻繁にみられるようになるのが岩田であった。芳吉とは異なり一貫して名字でのみ記されており、加えて日当を1日働けば「一人」、時間に応じて半人、〇歩と記録され、同日に複数に及んで示されることがこれだけ頻出した理由である。岩田と共に多く名を連ねたのが同じ大工の「杉田」であり、このことは昭和15（1940）年の共起ネットワーク（図33）にも読み取れる。同様に「松田」と「小沢」という大工も散見できるほか、「石工」の「井原（覚治）」は、昭和7（1932）年にはみられるが、「君夫」（井原覚治の兄弟か）と共に長屋門整備の関係で昭和15～16（1940～41）年に頻出する。なお、淑朗（顯造長男）に弁当と本を届けさせるであったり（昭和15年1月29日）、安来の清水古門堂茶室³¹（昭和9年6月28日）や米子の瑞泉寺と福巖院（昭和10年4月5日）をともに拝観したりと、日記における表記の仕方こそ顯造とはそこまで親密でなかったように映るが、岩田もまた大工仕事だけの関係にとどまらない信頼の厚さがうかがわれた。

また、日記に記載がないことから個人は同定できないが³²、昭和6～7（1931～32）年にかけて大工と夜に遊ぶ、囲碁を打つ、将棋を指すといった行為も多く記録されている³³。これは弟たち（清茂、正巳）が肺結核を患い、それ以前のように兄弟で遊ぶことが出来なくなってしまった状況にあり（昭和9年に相次いで病没する）、顯造にとって大工との交流は慰めにもなっていただろうし、それこそ昭和初期における一連の邸内整備の背景には、こうした顯造の孤独を和らげる意味があったことも想像させる。

4. まとめ

本稿は、「矢田貝家文書」にある家相図など家相関係資料と4代当主・矢田貝顯造（1905～1992年）が記した「矢田貝顯造日記」のうち、昭和3（1928）年から昭和16（1941）年にかけての部分を書き、矢田貝家の創設から昭和初期に施された邸内整備までの屋敷建物の系譜を詳らかにした。

家相図5枚を含む家相関係資料からは、嘉永7(1854)年(棟札により当家主屋が同年の上棟と知られてきた)から明治20年までの初代・齊一郎(1824~1894年)と2代・平重(1851~1904年)による邸内整備の移り変わりを俯瞰した。すなわち主屋は明治12(1879)年までに今日につながる平面構成が形づくられ、その敷地は、まず安政7(1860)年頃に北側を拡張し、続いて明治16(1883)年までにさらに北側を拡げ、邸内に当時営まれていた醸造業に関わる数々の建屋が軒を連ねた。その後、明治時代後半から大正時代の屋敷建物は、当家に伝わる数葉の古写真より断片的に知られるにとどまるが、この間に主屋南側に付された「雪隠」を除き、「オクナンド」(離れ)を加えてきた。

4代当主・顯造の日記より、庭園の整備と合わせて、社[昭和4年]、庭門[昭和6年]、茶室[昭和6-8年増築]、四阿(東屋)[昭和9年 戦中に裏庭から表庭に移築]、築地塀[昭和10年]、「煎茶室」(待合)[昭和11-12年]、「観楓庵」茶室[昭和13年]、中門・腰掛待合[昭和14年]、長屋門[昭和15-16年改修]、「新書斎」[戦中増築]と、昭和初期を通じて連続的に整備されてきたことを明らかにできた。

こうした矢田貝家の邸内整備の系譜は、中規模地主のもつ文化と教養が顕在したものといえ、これを伝える貴重な建築と庭園にほかならない。大正・昭和初期は、鉄道や輸送車両をはじめとした国内の流通基盤の整備と拡充を背景にして全国各地に優れた木造建築が建てられた時代として知られ、これを近代和風建築と呼んでいる。矢田貝家住宅の建屋の数々もこの歴史的な系譜に与するものである。

筆者が専門とする建築史学分野で多く論及される建材の購入先や輸送方法、さらには建材の仕様や建方にみる技術的な観点では、資料的限界もあり本稿で考究するまでには及べなかったが、一方で日記という資料を用いられたことで、これらの建屋をどのように使用していたかを詳らかにでき、接客を掌る性格の建屋でありながら、当主をはじめとした家族の生活を豊かに彩っていた様相を鮮明に捉えることができた。矢田貝家にとって痛ましい出来事ではあったが、「新座敷」が肺結核の隔離病棟として整備されたのに遡ることも当時の世相を表している。

このように建築史学分野において、多く扱い難い生活実態に及んで詳らかにし得たことは少なくない学術的意義が認められる。

注

- ¹ 令和7(2025)年には、庭園が鳥取県指定記念物に指定された。
- ² 奈良文化財研究所編『鳥取県の近代和風建築 - 鳥取県近代和風建築総合調査報告書』鳥取県教育委員会 平成19年 pp.208-209に報告されている。
- ³ 当時に筆者が国立米子工業高等専門学校建築学科に奉職していたことから関わり、研究メンバーとして本誌執筆者の一人である二階堂行宣氏とのつながりもここに遡る。
- ⁴ 前掲 注2『鳥取県の近代和風建築 - 鳥取県近代和風建築総合調査報告書』pp.208-209の配置図、主屋平面図に加筆の上で掲載した。
- ⁵ 同上。

- 6 日本民俗建築学会編『写真でみる民家大事典』柏書房 平成17年 p.112
- 7 宮内貴久『風水と家相の歴史』吉川弘文館 平成21年 pp.24-27
- 8 滋賀重列「住家」『建築雑誌』第194号 建築学会 明治36年、塚本靖「住家の話」『建築雑誌』第199号 建築学会 明治36年、矢橋賢吉「本邦に於ける家屋改良談」『建築雑誌』第203号 建築学会 明治36年が揃って明治36(1903)年に発表されており、これらを近代日本住宅史では「在来住宅批判」と呼び、後に大正時代から展開をみる生活改善運動につながる契機として位置づけている。
- 9 内田青蔵、藤谷陽悦、大川三雄『図説・近代日本住宅史：幕末から現代まで』鹿島出版会 平成13年 など
- 10 国登録有形文化財の登録にあたっては、平面図ならびに求積図、そして建物ごと A4用紙1枚相当の所見が求められるため、屋敷建物の変遷までの詳細な把握を必ずしも必要としていない。国指定重要文化財では、指定に向けた調査報告ないし文化財保存修理に関わる工事報告において断面図や立面図など平面図以外の図面も要し、保存修理において復原を行う年代設定の根拠にするなどの理由から屋敷建物の系譜を捉える必要もあるが、文化財建造物全体の観点でみれば、これが求められるケースは相対的に少ない。
- 11 1988(昭和63)年頃に施された屋根改修によって現在の黒燻瓦の棧瓦葺、鬘斗棟へと改変されたと伝わる。
- 12 本稿に掲載される特記のない古写真はいずれも矢田貝家所蔵になる。
- 13 棧瓦葺切妻造の屋根を和小屋で架けた土蔵造2階建の建築で、北側に半間幅、東側に1間幅の下屋をもつ。北面して2カ所の戸前をもつが、後補の下屋で覆われているため、東面する下屋からのアプローチとなる。竣工年代は不詳だが、4代・顯造の生まれた明治38(1905)年までには建てられていたと伝わる。土蔵ではあるが、下屋の回されていない南側壁面は2階開口部の下端まで、西側壁面は軒高さまで全面的に簾子下見板張で覆っており、漆喰塗は上部壁面ないし軒裏(軒先は塗り込めず垂木を並べる造作である)と外部に表れている範囲は狭く、桁両端の渦絵様、妻壁の鶴、そして戸前上の松を象ったと思しきものと鏝絵も全体的に控えめである。矢田貝家において道具蔵として用いられたもので、内部は1,2階とも2室に隔てられ、2階には主屋側の室内に備えられた箱段より昇降する。
- 14 控柱をもたず本柱2本のみで建つ棟門に分類されるもので、棧瓦葺切妻造平入の観音開きの板戸を設え、両脇に袖壁を備える。現状の扉形状は矢田貝家に残る古写真とは形を違えており、昭和10(1935)年の表庭の再拡張に伴い改められたものとみられる。
- 15 国登録有形文化財の登録時に「オクナンド」と茶室をもつ角屋に対して便宜上「離れ」と付けられたが、矢田貝家では従来この呼称としてきていない。建屋は「オクナンド」と茶室で構成され、四周に縁、両室の境には中廊下を通す。これは共に半間幅であり、桁行4間半、梁間2間半の規模をもつ。「オクナンド」は、当主の居間ならびに書齋として用いられてきた6畳の室で、縁は群青色、室内は黄蘗色の色漆喰で設えられ、釣床に天袋を備えただけの床脇(鋪込袋棚)と、座敷飾も数寄屋風の軽妙な装いをもつ。一方、茶室は4畳半台目で西側に床と台目畳を並べた、いわゆる風炉先床の形式である。表庭と面する東側は躰口と付書院、そして露地に面する南側は貴人口をもち、茶室には珍しく縁側を介して出入りする。遠州好みを基調とするが、躰口に畳縁を重ね、縁側をもつなど定石によらない特異な形式になるもので、矢田貝顯造の好みが強ク反映された茶室とみられる。
- 16 桁行2間、梁間1間になる木造平家建の建屋で、吹き放ちの床上部と荒壁で囲った、ともに1間四方の小間2室からなり、現在は銅板葺寄棟造とするが、「矢田貝顯造日記」の記述ならびに古写真から創建時は茅葺であったことがわかる。

- ¹⁷ 床面を石敷きとした基壇上に建てた片流れ屋根を架けた木造平家建の建築である。竹を嵌め込んだ下地窓を穿った袖壁をもつが、吹き放ちの造りで内部壁面は山吹色の色漆喰塗で仕上げられる。平成6(1994)年に接道する国道181号線の改修に伴い石州瓦の棧瓦葺であった設えを瓦棒葺に改めてきたが、平成27(2015)年1月にトラックが突入する事故によって全壊した。現在のものは後年に再建されたものである。
- ¹⁸ 「矢田貝顯造日記」をみると、その後も網代天井の造作や漆喰塗の工事が続けられている。矢田貝家では「離れ茶室」とも呼ばれた「観楓庵」茶室は、桁行3間、梁間1間半の木造平家建の建築で、現状は瓦棒葺寄棟造に土庇を東側から北側にかけて取り回す(竣工当初は棧瓦葺で土庇は柿葺であった)。東側に板畳を取り合わせた2畳隅炉、西側に4畳半四畳半切の茶室を構え、その中央に水屋を配する平面構成である。2席の茶室をもつことが、後にも建築工事が続けられた理由であろう。松平不昧公ゆかりの茶室として知られる「観月庵」(松江市指定文化財 細川三斎流の茶室とされる)に因んで「観楓庵」と名付けたとされるが、板畳を用いた2畳茶室と4畳半茶室の組み合わせも共通しており、この写しとみてよい。待庵に通じる2畳茶室、又隠に通じる4畳半茶室の取り合わせに加えて、2畳茶室の洞床や節付きの面皮材の多用など利休好みを感じさせる野趣に富むもので、とりわけこれより先に「オクナンド」に増築して設えられた茶室とは対照的な造りである。
- ¹⁹ 前出の通り、矢田貝家には複数の待合があり、これらとの混同を避けるために国登録有形文化財の登録時に便宜上「腰掛待合」とした桁行1間、梁間半間の銅板シングル葺切妻造木造平家建の建築である(竣工時は棧瓦葺に土庇を柿葺とした「観楓庵」茶室と同様の設えであった)。丸石を型枠にしてコンクリートを打設したベタ基礎の上に土台建で建ち、待合と雪隠で構成される。待合部分はL字型にした腰掛を配し、足元には自然石を埋め込む野趣に富む造作をもつ。
- ²⁰ 表庭と「観楓庵」茶室の建つ露地(茶庭)を区画する位置に建ち、本柱の後方に控柱を配し、本柱に架けた梁に載せる腕木で小屋組を支持する腕木門である。切妻造平入で観音開きとなる網代を入れた棧唐戸を残すが、杉皮葺とみられる屋根は銅板葺へと改められている。
- ²¹ 棧瓦葺切妻造、桁行4間、梁間1間半の木造平家建の建築で、長屋門らしく中央に観音開きとなる板戸を構え、右脇に潜門をもつ。中央の門扉を境に両脇に1室ずつ設け、右側は吹き放ちとして設えて腰掛を配し、左側は小間中幅の板畳を据えた2畳敷の小間で、室境には棧唐戸の引戸と式台をもつ。かつては主屋と同様に石州瓦に棟石を載せた造作であったという。
- ²² 和式住宅の玄関脇に洋風の応接室を付設した住宅形式をいい、明治時代から昭和初期において全国に広く普及したもので、前掲 注9『図説・近代日本住宅史：幕末から現代まで』pp.36-37などでも概説される。
- ²³ 戦後に及んで主屋の後方には、「炭小屋」、「水車小屋」、「大工小屋」、「木小屋」、隠居屋敷、「土蔵」、「下場」が建ち並んでいたが(一部は図20にもその姿がうかがえる)、昭和50年代から平成初期に相次いで解体されたという。
- ²⁴ 藤木竜也「明治から昭和戦前期における住宅関係刊行書・雑誌記事のテキストマイニングを用いた分析考察」『日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』日本建築学会 令和4年 pp.617-620の拙稿が唯一の論考で、文献等の歴史的資料のデジタルテキストデータを必要とすることが大きな制約になっていると思われる。建築学分野でも建築計画や環境工学の分野では積極的に用いられており、例えば、日本建築学会において令和5～7(2023～25)年に発表されたもののうち36件の研究論文においてテキストマイニングが使われている。
- ²⁵ 山田太造ほか「前近代日本史史料における人物関係とその時空間変化 天正期古記録『上井覚兼日記』

を例に』『じんもんこん2017論文集』情報処理学会 平成29年 pp.61-68、山下泰生「ウィーン宮廷長官の見た啓蒙改革：ケーフェンヒュラー侯爵の『日記』の分析を通して」科学研究課題番号 20J20708 令和2～4年度、渡邊勉「日記からみるアジア・太平洋戦争下の感情変容に関する計量社会学的研究」科学研究課題番号 23K01741 令和5～8年度 が挙げられる。

- ²⁶ 樋口耕一博士が開発したテキストデータの統計分析のためのソフトウェア <http://khcoder.net/> である。
- ²⁷ 肺結核の療養中は、清茂が隠居屋敷、正巳が「下場」2階（後の「新座敷二階」）を用いたと伝わる。
- ²⁸ 「矢田貝顯造日記」において多く「独楽ス」と記される。日本語学の見地において語用的には「独楽をする」の意味をもって読むものだが、例えば「殆ど一日独楽ス」（昭和8年9月24日）といった記述などから「独り楽しむ」の意味をもって特定の行為を示さない言葉として理解しておく方が自然だろう。なお、日記における「独楽」の初出は、昭和7（1932）年11月6日で清茂、正巳ともに肺結核の療養に入っている時期にあたり、これもまた顯造の置かれた状況をよく伝えているように思わせる。
- ²⁹ 休み等で大工が来なかった旨の記述も含むため、ここに集計した日数分の工事に従事したとは限らないことを付記しておく。
- ³⁰ 先にふれたように名詞と動詞に限定して抽出し、大工に関連する記述であることを鑑みて「大工」を除外して各年で3回以上使用されているものをまとめた。例えば、大工の芳吉は「芳」とも表記されるため、同一の意味をもつものは合算して集計している。
- ³¹ 島根県安来市の清水寺境内にある蓮乗院に文化年間（1804-1818）に建てられたと伝わる茶室である。島根県指定有形文化財に指定される松江藩の茶道文化を伝える歴史的建造物として知られる。
- ³² 権代と記された大工とは、昭和6（1931）年10月4日、9日、10日、20日の夜に遊んでおり、11月3日にはともに松茸狩りをしている。また、寿と記される大工とも昭和7（1932）年10月22日に囲碁を打っており、一部には個人を同定できる記述が認められる。
- ³³ 昭和6（1931）年に夜の遊び2回、囲碁2回、昭和7（1932）年に夜の遊び16回、囲碁9回、将棋8回、昭和8（1933）年に囲碁4回が記されている。